

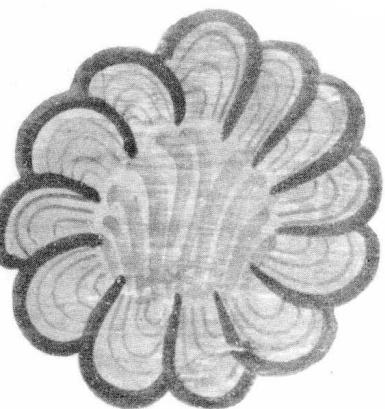


質屋の女房

・

族団樂図

安岡章太郎全集 V



安岡章太郎全集 V

質屋の女房・家族団欒図

昭和四十六年五月二〇日 第一刷発行

著 者 安岡章太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二一二

郵便番号 一一二

電話(九四五)一一二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定 価 一一〇〇円

© Shotaro Yasuoka 1971, Printed in Japan

乱丁本落丁本はお取り替えます。

安岡章太郎全集Ⅴ

質屋の女房・家族団欒図

目次

美しい瞳

鼻の中の目覚時計

緑色の豚

雨

河豚

子供部屋

餓

質屋の女房

革の臭ひ

家族団欒図

7

27

57

75

91

109

129

147

167

189

裏庭

軍歌

焼き栗とアスパラガスの街

野の声

猫の庭

ソウタと犬と

テーブル・スピーチ

木の上の生活

解説

微笑と変貌 古山高麗雄

446

425

377

341

309

287

255

233

209

装幀 田村義也

安岡章太郎全集Ⅴ

質屋の女房・家族団欒図

美しい瞳

私は、父が軍人だったので幼時から、一定の場所に住むことが出来ず、あちこちを転転とさせられた。転任のときは旅費が余分に支給されるので、一般に下級将校の間では歓迎すべきこととされたらしい。しかし京城から弘前へ行かされることになったときは、父も母もひどく不機嫌であつた。私は子供心にそれがわかつた。東京へ行けるものと思つてゐたアテがはづれたらしい。

弘前の町は、おそろしく貧弱で陰気なものに私の眼にもうつつた。街中を乗合馬車が走つてをり、それが唯一の交通機関だつた。表通りの商店は低い軒を長くのばして、道路を覆つてゐた。さうしないと、冬に雪が積つて店は完全に雪の中に埋められてしまふからだ、その煤けた軒の奥にボロ裂れのやうな老婆が赤く爛れた眼をあけてジッとこちらを見てゐるところは、陰氣をとりこして怖ろしい感じさへした。

母は毎日、溜め息ばかりつきながら、私が新しくやつてきた女中と遊んでゐたりすると、ヒステリックな声を上げて、

「こつちへきて、一人で遊びなさい」と云つた。女中の頭髮にはシラミが卵を生みつけてゐるからといふのである。

しかし、私は女中と遊ぶ必要があつた。私は何よりも学校へ行つて言葉がすこしもつうじないことに閉口してゐたのである。現在ではラジオや映画の影響でどうなつてゐるかわからないが、当時の津軽ことばは、父親のことを「おど」といふのはまだしも、母親のことは「あッぱ」、子供のことは「わらすこ」、赤ん坊のことは「みづこ」、たくさんのことは「むつたと」、「それだから」といふのは「んだはんで」といった具合で、それをたてつづけに話されると、到底日本語とは思へなかつた。ことに相手は小学校三年の子供だから、標準語はほとんど知らない。自然、私は遊び相手兼通訳として女中がそばにゐてくれなくてはならなかつた。もつともその女中にしては片岡千恵蔵のことを「つえぞう」と呼んでゐるのであるが。

そんな町で、小学校だけは鉄筋コンクリートの不思議なほど立派なものだつたが、中にゐる生徒や先生たちはひどく野蛮であるやうに思はれた。私は生れてはじめて副級長の職につくことができたが、それまで行つてゐた京城の学校では中ぐらゐの成績だつたのだから、それだけこちらが程度が低かつたのであらう。しかし私は多分に買ひかぶられてゐたやうである。私の服装や学

用品がいくらか都会的だといふだけで、苦手の図画や習字や体操までが良い点をつけられてゐた。

子供のうち、洋服をきてくるのは三分の一ぐらゐで、あとはモンペに着物をきたり、手首をボタンでとめるシャツとも和服のジューパンともつかぬものをつけて、冬になるとその上に綿入れのチャンチャンコや、山犬の皮を背負つてくる。そんな服装を私は珍妙だとおもふ以上に、どこかで軽蔑した気持でながめてゐた。

アルミニュームの弁当箱にご飯をいれてくるのも、やはり組の三分の一ほどで、あとの子は大抵、赤ん坊の頭ぐらゐのオムスピの中に塩マスかシャケの入つてゐるのを一個、風呂敷に包んで下げてきてゐた。しかし中には、そのオムスピも持つてこない子もゐた。私のとなりに坐つてゐた奈良岡といふ子がさうだつた。皆が弁当を食べてゐる間、奈良岡君が何をしてゐたか、私はおぼえてゐない。たぶん窓の外を向いて、黙つて立つてゐたかもしれない。けれども、たまに弁当をもつてきたときの奈良岡君がそれを食べるときの顔つきは、よくおぼえてゐる。机に両肘をついて、二つに割つたオムスピの間から、焼いた塩マスの皮を引つぱり出しながら、ペロペロとそれを舐めたり、口からもう一度出して眺めたりしてゐる。彼の喉は丸くて、すべっこくて、ご飯のカタマリがとほるたびに、ひくひくとうごくのが外から見てもハッキリとわかるのだ。

私は、そんな奈良岡君のあらゆるところが全部きらひだつた。私は弁当にもつてきたパンの耳

の食ひのこしを、組ぢゆうの誰彼に与へて輕薄にも得意になつてゐたが、となりにゐる奈良岡君にだけは、どうしてもそれをやる氣になれなかつた。彼がとなりで私のパンを食べるところを見てゐるときなど、

「おい、臭いぞ。あつちへ行け」

などと、いま思ふと虫酸の走るやうなことを云つたが、そんなとき彼が細面の顔にうかべる氣弱な微笑を、私はなぜかたまらないほどイラ立たしくおもつた。

そのほかにも私は、彼にはことごと辛く當つてゐた。それによつて私は威勢を示さうとしてゐたのかもしれない。しかし何よりも、こんなきたらしい子のそばにはゐたくないと思つたのだ。それなのに奈良岡君は、どんなにイジめられても決して私のとなりの席から動かうとしなかつた。文句ひとつ云はず、途方にくれたやうなウス笑ひをうかべてゐるばかりだつた。それが私を、ますますイラ立たせた。

私をヒイキにしてゐてくれた先生は、たしかに私が何をやつてゐるか知つてゐるのに、いつも見ない振りをしてゐた。

ある日、私は授業のはじまるまへに、奈良岡君の椅子に、自分の鼻クソをまるめてどつきり並べておいた。奈良岡君は先生に訴へることも出来ず、坐ることも出来ず、立つたままだつたが、ふと見ると両目が涙でウルんでゐたのだ。これは私にとつては意外な出来事だつた。——この、

きたらしい子が、どうして鼻クソの上に坐るぐらゐのことができないのだらう？

先生は、見兼ねて何か云はうとした。しかしチヨビ髭を生やした鼻の下をすこし尖らせただけで結局、何も云はなかつたから、奈良岡君は椅子の一番はしに、腰を三分の一ほど掛けて坐るより仕方がなかつた。

そのことがあつてから、いつの間にか奈良岡君の姿は教室から見えなくなつてゐた。私は結構、セイセイしたつもりになつてゐた。

冬になつて、私ははじめておぼえたスキーで遊ぶことに熱中した。そのころには、もう言葉もほとんどわかるやうになり、遊び仲間も何人か出来てゐたが、私は仲間のゐないときでも一人で毎日のやうに、笹森山といふ、練兵場の近くの丘へ滑りに行つた。

その日も、私は暗くなるまでその丘で一人で滑つたり転んだりして、その帰りみちだ。リンゴ林のかげから山のやうに荷物をつんだソリがこちらに向かつてやつてきた。私はギョツとした。ソリを引つばつてゐるのは、れいの犬の毛皮を着た、このへんでよく見掛ける小父さんだが、ふと見ると、その後押しをやつてゐるのは奈良岡君にちがひなかつたからだ。

私は、いまさら暗くなつた笹森山へ引き返すわけには行かなかつた。かといつて道は一本だか

ら、どうしたつてソリに正面からぶつからないわけには行かない。

——きつと、ぼくは云ひつけられてゐるにちがひない。ぼくはあの小父さんから、どんなにひどく怒られても、殴られても、文句は云へないはずだと観念した。

しかし、ソリが近づいてくるにつれて、私はふと自分の目をうたぐつた。奈良岡君がこつちを向いてニコリ笑ひかけてゐるのだ。私は何かの間違ひかと思つた。しかし、そばまでくると奈良岡君は、たしかに私に向かつて手を上げて、

「ヤア」と元氣に呼びかけるのだ。

私も、何かわからぬままに、

「ヤア」と、スキーの杖を上げてこたへた。

いまは手拭ひで頬かむりした小さな顔がハッキリ奈良岡君だとわかる。ふりかかる粉雪の中で奈良岡君は鼻の先を真赤にしながら、せいいつばいなつかしさうにニコニコ笑つてゐる。私は彼が、ソリを引っぱつてゐる小父さんに向かつて云ふのを聞いた。

「お父、これは学校の友達だ。とても良く出来て、やさしい子だ」

奈良岡君のお父さんもニコニコ笑つて、

「ヤア」と云つた。

私は、ほつとするといつしよに、氣恥づかしさと嬉しさにゐたたまれない氣持で、

「元気でな、さよなら」

とだけ大声に云ふと、ソリのそばを大急ぎにすりぬけて、一目散に駆け出した。

.....

それから十年たつて、私は北満の兵營にゐた。二等兵のなかでも、もつとも出来の悪い二等兵として幹部候補生の試験にも落第し、連隊長から、

「そんなことでは、お父さんのあとを、どうして嗣げるのだ」

と、妙に尻こそばゆいやうな叱られ方をし、班長や古年次兵からは、あまりの不器用さを呆れられながら、泥にまみれた豚のやうな毎日を送つてゐた。ひとりつ子で甘やかされ放題に甘やかされてきた私は、誰かの手助けなしには寢床一つ満足にはつくれなかつたのである。そんな私にとつては、食ひものだけが唯一の関心事だつた。将校になる見込みのなくなつた私は、何とかして炊事当番になれないものだらうか、そして思ひつきり大きな、直径一尺ほどのマンジュウをつくつて、一人でそれを食べたいものだ、と、真剣に考へてゐた。炊事には比較的のろまな兵隊がまはされるが多かつたのである。

しかし、一期の教育がをはつて検閲をすませるまでは、炊事にも馬小屋にもまはされない。そのうち動員令が下つて、部隊は南下することになつたので、私は巨大なマンジュウを夢みることもあきらめなくてはならなかつた。

そのかはり中隊の湯沸し当番につくことができた。

湯沸し場は、廁につながる洗濯場のすみにあつて、いつもジメジメした臭氣と湿氣にとりまかれてをり、中隊のなかでも最も陰氣な場所だつたが、なまけものの兵隊にとつては便所と同じく居心地は悪くはなかつた。そのうへ下士官や古兵が、釜の焚き口に味噌汁をあたためにやつてくるので、その幾分かをかすめることが出来るわけだ。私は釜のまはりに六つも七つもの飯盒を並べて、その前につくねんと、飲み屋の燗番を氣取つてゐたのである。

その日も、私は煤に汚れた真黒な顔で、湯沸し釜の前に坐つてゐた。古兵たちの持つてきた飯盒に、あふれた飯を温めをはつて、それぞれ内務班へ運ばせた。あとは日夕点呼がくるまでの間、呆然と焚き口にもえてゐる火をながめてゐればよいのである。一つだけ取りに來ない飯盒があつた。となりの班の天沼といふ初年兵がもつてきたものだ。開けてみると白い一装米の粥だつた。

「ちえッ」と私はつぶやいた。「初年兵のくせに贅沢なマネをしやがる」

一装米といふのは白米のことで、式の日、あるひは戦闘部隊にだけ供されるものと聞かされてゐた。動員令が下つて以來、分遣隊から歸つてくる者がゐるかとおもふと、他の隊へ出される